

# 熊本大学蔵永青文庫本「壁草」(上)

岩 下 紀 之

宗長の連歌集「壁草」については、かつて諸本を検討し「壁草諸本成立考」と題し、拙文を「国文学研究第五一集」に掲載したが、その後、金子金治郎博士「連歌古注釈集」、重松裕己氏による古典文庫の「壁草」等によって、その他の諸本の存在についても紹介がなされた。ここに翻刻した永青文庫本は、永禄二年細川藤孝（後出家して幽斎）の書写で、注釈本諸本のうちでは年代が最も古く、本文もまたすぐれている。ただおしむらくは、上巻のみの零本であって、幽斎が書写した時点ですでに不完全であったことは、奥書が旅の部のあとに記されているので明確である。

本稿は分量の都合で、夏の部までを掲載するが、こま

では、書陵部蔵の高野本とさして差異はない。ところが冬、旅の部になるとこの幽斎本と高野本とはっきり異なるのであって、もう一つの注釈本である名古屋大学本と比較してみると、名古屋大学本は、幽斎本と一致するのである。その他、特に大阪大学蔵の土橋文庫本等、「壁草」注釈本に関しては前稿「成立稿」は多分に補正すべき点がある。それについては既に別稿を用意してあるので詳細はそちらにゆずることとする。

翻刻の方針としては常用の文字を用い、仮名遣いなどは原本通りである。私意によるのは注文のところどころに読点を打ったことと、句に通し番号を付した点である。秋以後の部は次号に掲載することとしたい。

壁草連歌上 春

一 わかれしかたそけふもかすめる

二 天地となりていく春立ぬらむ

前句は旅の句成へし、別こし跡の日毎に遠く霞めるさま也、付る心は天地別れしより此かた立春のけふかすむらんといへる心なり

三 一むらのかすみもとをく打はへて

四 幾世けふたつ春の山のは

一村のかすみといへるは眼前の事なるを、遠く打はへてとは、そのかみ春立初し霞の一村、今の世まで遠くうちはへて、かすめるとにや

五 枝よはけなる青柳のかけ

六 春はふく風のちからも見えやらて

枝よはけなるといふより、風のちからと思ひよれるにや春風のゆるらかなるさま也、風のちからけたしよはしといへる事、をとめのまき哉らんに見えたり

七 ことの外なる春のゆふ風

八 立かへりけふは去年より寒き日に

事の外なるといへる所大事なれば、去年より寒きと付侍るにや、さむき事冬こそ本意ならぬ、春の去年よりさむ

き事ことの外なるにや

九 雪よりいつる鳥の一こゑ

一〇 山もとのかすみの朝けおくさえて

山本は陽気はやければ、霞てふかき也、おくはいまた雪なども残れる所より、鳥のうちなきて霞める山もとへ出たるさま也

二 雲井になりぬたつの鳴声

三 立かへりふるき宮このはるかすみ

雲井に成ぬとは、古き都の春来てあらたまる事也、たつはふるき都にはかならずあるものと見えたり、前句は空に飛行さま也

三 木末を山の庭のうくひす

四 玉すたれあくるよをこめかすみ来て

稍を山とは庭の山に取なせり、玉すたれあくれは庭の山に驚なきたる様也、曙ふかき霞の眺望成へし

五 春もあはれになら山のかげ

六 朝かすみ野もろも庵や出てみむ

あはれといへるに霞雲を付侍る事也、彼とふひの野守も此かすみを出てみんと也、かすみのおもしろきをいへり

七 花はいつくそ梅にほふなり

八 かすむ夜は猶あけほのくらふ山

くらふ山に梅を詠る事作例おほし、かすめるよは明方猶

くらぎと云り、しかあればはなはいつくといへるにや、  
物にくらふる時は、ふの字をにこりて読也

元 あたしこゝろはさもあらはあれ

三 明更やかすみにたてる末の松

末の松はあたなる事に云り、さりながら明更に霞たる末  
の松は面白ければ、あたなるこゝろはさもあらはあれと  
也、君をよきてあたし心を我もたは末の松山浪もこえな  
ん、此哥の心也

三 岩こゆる谷の下水音はして

三 三ふりつむみ雪いつことくらむ

これはうち見えたるまゝ也、み雪の何方か消て、岩こゆ  
る水の音する哉らんとうたかへる心也

三 三 その山しなの石はしる水

三 三 春風の音羽のみねに雪消て

山しなは人康親王のおはしまし、宮なり、伊勢物語に、  
その山しなの宮、滝落し水はしらせと有、音羽山の麓な  
れば、雪消時分は山しなの宮は水も石はしるへきにや

三 三 うつみ火も猶消やらぬ老の床

三 三 春さへとつる窓のしらゆき

なを消やらぬと云るより春の心をとりよれるにや、春も  
窓の雪ふかくは埋火絶さるへし

三 三 道しるへせよ谷のうくひす

三 三 跡うつむ雪に岩ふむ春寒て

春の雪ふかき山路をしのくには、鶯ならて道しるへも侍  
らしかし

三 三 さやかにみみるへき花に雲かすみ

三 三 あさ日いさよふ春のとを山

いさよふ月なといへるも出やらぬ事をいへり、春の朝日  
の霞に出やらぬは、さやかにみ見えぬ心にや

三 三 雪間見えそめ日かけさす比

三 三 若草をさそふ鶯今朝なきて

鶯の春の日影に鳴たるは若草をさそふやうにおほゆると  
にや、雪間には若草有物也、春の日かけには雪まみゆる  
ゆへ也

三 三 まつとへかしな春の山さと

三 三 鶯も雪消はとやまたるらむ

前句とへかしとは人のとへかしと也、付る心は、鶯にと  
へかしと也、雪消はとはんとやまたるゝ、きえぬさきに  
まつとへかしと也

三 三 身をいさめけり夢の春風

三 三 雲うくひすにぬる夜の床をおき初て

身をいさめけり大事也、春のよ打つけてねたるを夜ふか  
く鳴たるは、おきよといさめたるさまなれば、身をいさ  
めけりといへるにや

三〇 花にさそはれくるもはかなし

三〇 鶯のやとあくからず梅さきて

花にさそはれくるとは人の事也、付る心は、鶯の梅さけは宿をあくかるゝ様也、其もはかなしと也、あくからずとは、あくからする心也

三〇 かたらひくらすうくひすの声

三〇 行やらぬ春の山さと梅さきて

これも見えたる様也、鶯にかたらひくらすと也

三〇 なひく柳のいろそはるけき

三〇 梅さけるさほの河原や匂ふらむ

さほの河原に梅柳をよめる事、類多し、色そはるけきと有に河原といへる詞、いみしき粉骨と聞え侍り

三〇 身にしむ風のことやつてまし

三〇 梅か香にぬしさたまらすあくかかれて

梅か香は誰うつり香ともなくあくかかれ侍れば、風にやことつてんと也、身にしむとは梅のにほひの身にしめるをいへり

三〇 なれきつる花もあたる色見えて

三〇 うつらぬもなく梅にほふそて

梅か香は誰袖にもうつり侍れば、あたるはなとねたみたる心也

三〇 むら／＼しける道のへのくさ

三〇 青柳にかけふむ人の跡見えて

村／＼茂るは柳の下草にや、人往来しければ、むら／＼茂るとかや、打なひき春は来にけり青柳のかけふむ道に人のやすらふ

三〇 さほ姫の面影かすむ朝ほらけ

三〇 柳はつゆの玉かつらせり

さほ姫は春をつかさとれる神也、姫といへるは女神にや柳の露の玉かつらしたるはさほ姫の面影と也

三〇 をく露はらふ山かつのみち

三〇 春草にかきほの柳うちへて

置露はらふとはやまかつの払也、付心は春草に柳打はへて、草の露をはらふと侍るにや

三〇 くちははてしなせゝの埋木

三〇 水こゆるねはふし柳春をえて

せゝの埋木は柳のふしたるに取なせり、柳は水に沈みぬれとも、春きぬれは必青やかになる物也

三〇 をさゝむらたつ岡のをち方

三〇 駒いはふ朝けや春に成ぬらむ

さゝはこまのこのむ草にや、遠方と云る、大事なれば、駒いはふと付るにや、此心つかひは心ことに思ふへき事也

三〇 それかあらぬかけふる一むら

天下もえはえそわか草の野への色

けふる一むらは里などの事にや、付心は春草のわつかにもえ出たる一村は、えそわかぬと也、何の草とも知ぬ心也

弄 木のめもいまは春のいろく

春若草のむらさきの行くらす日に

／＼むらさきの色こき時はめもはるに野なる草木そわかれさりける、大方此哥の心也、春の木のめの色く／＼なる時はこなたかなたへ行かよふ心也、あかねさすむらさきのゆきしめのゆきのもりはみずや君か袖ふる

六二 うら浪ふけてかりかへるなり

三三 かつそよくあしの若葉の春風に

あしの若葉の春風は音とも聞え侍らし、さりなから春の夜いたう更て物しつかなる時は、あしの若葉も打そよきたる折ふし、鴈の帰たる様也

三三 あはれいとせはなに山風

畜しかのうらは春やなぎさの宮木もり

志賀の花そのに春の山風吹たるは幾年にや成ぬらんと、問んとすればとふへき人もなし、春や宮木もりに成ぬらんと、それにや聞ましと也

空 春もなからの山かせそふく

突うらかすむしかのふるさと月すみて

なからの山は春風吹は月澄る也、海辺は霞ぬる様也

空 つかさとまてもふかき梅か、

空月や猶あらしの末にかすむらむ

嵐の末に梅か香かすみたらんは誰さとまても也、いく

里の月の光にかすむらん梅さく山のみねの春風、と云る

哥にや

六九 かすみのうちはまつ風そふく

七鴈かへるうらはの月にさよ更て

春の月霞たるに、帰鴈の打鳴たる夜の更たれば、松風も霞より吹出たる様也、只夜更たる躰也

七 一つにしもしかし春そとあくかれて

三 おほろ月夜にまよふかりかね

これはさせるふしも侍らし、只本歌のより合迄也、てりもせずもりもはてぬ春のよの躰月よにしく物そなき

三三 月にかすみのころもほすころ

七 鴈かへる空とや雨もはれぬらむ

霞の衣ほすといへるに雨晴と也、衣に鴈は縁有事にや

空 かつ花をたれわかやとの物ならむ

かすみの外に花の色めつらしく見えたるは誰か宿の初

花にやとらやむ心也

七 何をしつけさや春のあさ露

夫おきゐつゝ思ふ花さくよるの雨

よるの雨におきゐたる朝、花のさぎたる朝露をみて、夜の雨より猶静なるとかんしたる心也

充 いそくかきりもなとかつれなき

△さかすやは有へき花に日数へて

前句恋の句にや、とてもさかすは有ましき花の、日数へてまたるゝを恨たるよし也

△ さくらそわかぬみねのしら雲

△ 青柳のかつらきしるく花さきて

桜と白雲は分別なきにや、柳はそれと見ゆれば、かつらきしるくと侍るにや

△ みねをへたつる山とりのこゑ

△ 山鳥はなを夜のまゝなるあさかすみ

山鳥はひるは尾上を隔てゝと有と云り、花はよるのまゝ隔もなきと、霞におほせていへるにや

△ けふるは秋のしるし成けり

△ ほのかすむ木末の花をみわの里

花の梢は霞、秋のしるしは煙たる眺望なるへし

△ 見ればさひしくけふり立なり

△ 一むらのはやしのしつや花さきて

さひしくといへるより、一村の賤屋と侍るにや、みればといへるに花はおもひよれり

△ 爪木こるてふ道かすかなり

△ 山かつの外は見えこぬはなさきて

み山の花は尋でみる人もまれならんかし、只山かつの爪木のかよひのみ有をいへり

△ 春はかはらすかすみたつそら

△ 花のみやふるき都も又さかむ

古き都も花はかはらすさきはへる事也

△ とを山さくらおりくるやたれ

△ 九重の都の花に猶あかて

花に執心ふかくして、都をきて遠山のはな折くる事をいへり

△ いたれの山をたつねてかどふ

△ 花にたれみやこをきてうかるらん

みやこの外にうかるゝ人は、いつれの山を尋てかどふらんと也

△ ふるさとさひし住やうかれむ

△ たたれもけふ花の山路に旅たちて

ふるさと人ごとくく花見に旅立たれば、残る住人、すみやうかれんと也

△ 見た人の心にならふ我なれや

△ 一〇みるく花にけふおもふとち

花を見る人あた人も、それを思ふうちになるゝ人はあ

人成へし、前句は恋の句也、付様めつらしきにや

二〇 野山のかきりたつねてそ行

二一 花に今朝かすみとともに立初て

朝の霞とともに宿をいて、野山のかきりを尋るにや

二三 こそのしほりの花や待らむ

二四 山さくらまた見ぬ方に遠くきぬ

また見ぬかたにとをくきぬといへり、去年のしるへを忘れぬる心おもしろき也

二五 見しはわすれぬ思ひとをしれ

二六 花さかは心を去年のしほりにて

見しは忘ぬと侍るに、心を去年のしほり、人の思ひよりかたき様也

二七 もとむるにこそ道はたえぬれ

二八 中／＼のしほりにまよふ花さきて

中／＼のしほりに迷ふ山路あたらしき事也、しほりなくはもとめすともよもまよはしと也

二九 旅にきのふの雨ははれけり

三〇 岩ねふむ山路わする、花さきて

岩ねをしのくくるしさを、夜間の雨にさきいてたる花に忘ぬる心也

三一 駒もなつむや山のした道

三二 岩ねふむ花にはあはず日はくれて

これは山路をはる／＼と尋ぬれと、花にあはぬ様也、こまもなつむとはつかれたる事也

二三 かさなる山は岩ねふむみち

二四 花もしいく白雲に尋ぬらむ

山／＼嶺／＼の白雲に花を尋迷ふ心也、此ころさしを花もしれとかこちたる心也

二五 たよりもまれにとをき山こえ

二六 尋ねぬよふこ鳥たに花になけ

便といへるによふこ鳥付る事はつねの義也、尋る花にせめてよふこ鳥成とも鳴てしらせよと也

二七 みやこにかへる人をまつくれ

二八 けふみつる花に山ちをふみまよひ

花をみてかへるさに、山路をふみ迷ひたる様面白や、都人のみてかへるを待てつれんと也

二九 山のかすみにやすらひそ行

三〇 一もとに日もくれぬへく花を見て

やすらひそ行と有を、一本に日をくらしたるよしを付はへり、花をみて行やらぬ様にや

三一 あゆみのかすのしけき神かき

三二 三行と見て又やみむろの山さくら

見ても／＼花にあかぬ心也、神かきといへるに、みむろの桜とにや

二三 花さくたひにみよし野、おく

二四 今も猶あまつ袖ふる山さくら

吉野にはむかし天女のくたりし山也、然は袖ふる山といへり、花咲度に今も天女のくたるとにやと也

二五 露の身もをき所なき山のかけ

二六 わか袖ふれは花やしほれむ

我袖ふれはとは、卑下したる心也、花のあたりにも身をはをきかたきと也

二七 とはれしのちそいとゝしのはむ

二八 花にけふ木のもとすみを見え初て

山居の躰也、花ゆへに人にしられぬれば、猶く忍ふへきと也、とはれし後とは、花をとふ人を云るにや

二九 とはすともうらみはつへき友ならて

三〇 思ふや花はみるにまされる

花はみるよりも猶思ひやる心さしふかゝらんと也、されはとはすとも恨ましき由を付侍るにや

三一 かへりをくれぬさくらちるやま

三二 みる人のなへてになさは花もうし

花をみてかへる人に、独をくれたる心さしいとふかし、是ををしなへて花みる人のなみに思は、はなもつらからんと、花に対して云るにや

三三 たのむゆへにそ身をもくるしむ

一四 うつろはむ色としるく花をみて

前句は恋の句也、花はうつろはんと思ひしらは、おしき心もあらしと也、うつろはむとしりなから、さりともち頼てみるゆへに、身をもくるしむにや

一五 おしむ花やはしるておらまし

一六 いさけふは野山のさくら行て見よ

人のおしむ花をはいかてか折んと也、野山の花をはおしむ人なければ、心やすく打てもみんと也

一七 むくらのやとにたへん物かは

一八 春くれと花見に行ん身はふりて

花をみんと思へは、身は老て葎の宿などに有人の心也、八重葎心のうちにしけゝれば花みに行ん出立もせず、この哥の心にや

一九 みをひたすらにうちやまかせむ

二〇 世のうきも花見はわすれはてつへし

花みるうちは世のうき事も忘れぬると也、されは身を打まかせてみんと也

二一 来てみる山に草のかりいほ

二二 世をいとふころも花に付そめて

はなをみる山に草庵の有をみてうらやみたる心也、されは世をいとふ心も此花故に付たる心にや

二三 思ひとまらん旅としもなし



一四よをいとふ道に閑もる花もちれ

これは世をいとひて山へにおもむく事也、花はまたうき世の色なれば、道のせきもるといへり、花をも思ひすてたる道心也、いかばかりかふかゝらん

一五 露をこゝろの色の人

一六花にみな物思ひせぬ春もなし

花を見て物思ひする人は、みなあた人なるへし

一七 いのちにのこす入あひのかね

一八又やみむ老か世の花あすもまで

老後に花を見てあすも散らてまでといへる、哀浅からず、命に残すとは執心の事成へし

一九 しのもやほかへるいにしへ

二〇 あた人と成てもくらせ花の春

いにしへはいかに忍ふともかへるまし、されは人はいたつら物といふとも、花を見てくらさんと也、此あた人はいたつら人といへる心也

二一 うちまきれ行あらましの山

二二 すすくすへく誰か思ひし花さかり

前句は述懐の句也、世をいとほんとしたるあらましも心ぬるきゆへに打まされたる也、それを花のあらましに取なせり、さかり過ぎすみんと思ひしに、何事哉らんうちまきれてみぬ事也

一五 うつろふ色は月にありけり

一六 おきてみる花はさかりのあかつきに

花は暁、猶さかりの色みるに、月はかたふきて、光もろすくなる事をいへり、されはうつろふ色は月に有と也

一七 あはすともよしまつ尋見む

一八 身は花のさかりまつまもおほつかな

花さかりを待まも、身の上はおほつかなければ、とく尋てみんと也、身を覩したる句成へし、是は有心躰と申へくや

一九 身をすつへくは御よし野々おく

二〇 わか宿と尋のみこしはなを見て

此一句は、いさゝか心得かたき句也、此年比は只尋のみこし花を、今は我宿の物と見たる事也、世を捨たる宿也、今はわれよしの、奥の花をこそ宿の物とはみるへかりけれ

二一 むくらのやとはたれかとふ人

二二 さひしけにさし籠る門の花咲て

律の門などさしこもりたる花をは問人もまれならんと也

二三 めに見えぬ神とてあたになすや誰

二四 折人つらき花としらすや

これは有人神前の梅を折ければ、其夜の夢に神託して見え給哥に、情なく折人つらし梅の花あるし忘ぬ宿の立枝

を、此哥の心也、目に見えぬ神と思ひしに、かやうに夢

に見え給へは、あたに思ふましきと也

一三 それこそいまのあたとなるらめ

一四 おらせぬもくやしき花に風ふきて

人に折せぬを後悔したる事也、おしみつる心、あたとや

成ぬらんと、花に吹風をいへり

一五 ふかくはさのみ何をうらみむ

一六 おるもやは心なからぬ花のもと

心なき人はよも花を折しと也、されは折もふかく恨まし

きやとにや

一七 こゝろくらへにまけんとそする

一八 とふまでと折やらぬ花は散つへし

花を人のもとへ折てやらんと思へと、さりとも間ぬ事は

あらしと待程に、花もはや散方になれば、只まけて折て

やつかはさんと也

一九 いかにかはれるゆふへ成らむ

二〇 かりそめもたれかめかるゝ花の色

いかにかはれるを、花の色のかはりたる事に云り、かり

初もめをはなたぬ花の、いつの間にかはりたる色ならん

と也、くるとあくともかれぬ物を梅花いつの人まにうつ

ろひぬらん、此哥の心也

二一 たのむもはかないとけなき人

二二 わきて猶かたみや花もあたならん

源氏物語に、紫の上いまはの時に兵部卿の宮おさなくお

はしましし時、たいの前の花を形見にゆつり給へる事

也、それを母の形見と頼給しをはかなきと云り

二三 かすみたちつゝ日こそくれぬれ

二四 鳥そなく花のいつくにかへるらん

霞立て日暮ぬる時分、鳥の打鳴てかへるを花のいつくにか

かへるらんと打詠たる様也

二五 あさな／＼霞める野へに打出て

二六 見れば宮こは花の雲井路

都のほとりの野へに立出てみれば、都は花の雲のやう

に見えたる眺望迄也

二七 鐘を木の間の花のした道

二八 山桜軒はにたかき寺ふりて

花の下道といへるに高き山寺と付也、寺は鐘より思寄に

や

二九 道はたゝこけに絶／＼かたはかり

三〇 つつらおりなる山さくらほな

つつらおりとは山路のこなたかなたへまかれるをいへ

り、心は見えたるはかり也

三一 とふともあはし世をすつる山

三二 みねの庵花のたよりは何ならむ

花にくる次に立よる人は心さしもあらしと云り、されは  
とふともあはしと嶺の庵の人の心也

一八三 やかてくれ行野へのはるけさ

一八四 木のもとをかへれば花にかねなりて

終日花をみて木のもとをかへれば、やかて鐘もなり日も  
暮ぬる様也

一八五 里人はかへる野はらのかりまくら

一八六 花にさよふけ松風そふく

里人は皆かへりたるに、独残れる旅人の心也、花にさ夜  
更たる松風をひとり聞たる、あはれ浅からすかし

一八七 春やいたらぬかたもなからむ

一八八 石はしる滝こそ花にうらみなれ

前句は春はいつくの里へもいたるらんといへるを、付心  
は春はいつくへも行て花をみれとも、滝のあたりはえ行  
ぬ也、石はしる滝なくもかなさくら花手折て行んみぬ人  
のため

一九〇 うらみのあれはことの葉もなし

一九一 つけさりし花に風ふく宿とひて

此こゝろは告さりし恨也、花に風ふく時節聞て猶、恨た  
る心也、言の葉もなしとは恨ふかければ物をもいはぬ心  
也

一九二 ことゝひかほの松風そふく

一九三 つらかりし花のわかれを忘れめや

花を散したる松風、花の後まてことゝひかほに吹たるを  
かこちたる心にや、花を散したる恨はわするましきと也

一九四 今さらいはんことの葉もなし

一四五 花のさかりとはぬうらみはちるを見よ

花のさかりには音もせて散時分に間人をうらみたるよし  
也、されは言の葉もなし、只ちるを見よといへり

一五五 春草しける野へのふるさと

一五六 花も露たれをしのふのみたるらん

古郷の花は誰を思ふらんと露けき花をみて感たる心也

一九七 あやなおほくのうらみをそおふ

一九八 程もなくちる世にはなのさき初て

程もへす散世に花の咲初てあやなおほくの恨をそおふ  
といへり

一九九 余波のみわれにとゝまる涙にて

二〇〇 うきにかはれと花やちりけむ

此句大方尺しかたし、おしみつる花散てうき事はかり残  
たる事也

二〇一 はかなや何のうらみなるらむ

二〇二 むかし花風にてかせや春のはな

今花に吹風は昔花にてや有つらんと、時の酬を観したる  
心也

二三 鳥は音に鳴雪のかり人

二四 さくらはなふきかふ風に駒とめて

雪のかり人をちりかふ桜かりに取なせり

二五 はかなきはたゝ春花イのならひそ

二六 うらみしよ桜はかりやうつろはん

花といふつらのちらぬはなければ、桜はかりは恨ましきと

也、桜はかりやとはやはと云心也、此や哥にも多し、哥

により句によりて心得へきにや

二七 をそくとひてはいそくかへるさ

二八 ふかゝらぬこゝろを花や散てみむ

花の散かたにとひてかへるさをいそく人の事也、か様に

ふかゝらぬ人は、散て後はかけもせしと也、花は散てや

人の心をみんと也

二九 ひたすら雪になれるくろかみ

三〇 やすらへははらふはかりに花ちりて

花の散木陰にやすらへは、さなから白髪に成たる様也

三一 世の中に何かふり行事ならぬ

三二 世の中のはなは庭のしら雪

世の中に有と有物、皆ふり行事を觀したる心也、花も昨

日迄は梢に見しかと、けふは庭の雪とふりたる様也

三三 もとのみとりをみねの松かけ

三四 ちる花はうつむもこけにはや朽て

苔上に散たる花、やかて朽ぬれば、又こけのみとりあら  
はれたるさま也

三五 庭にくちぬる木ゝのあはれさ

二六 さくら花雪もしはしの名残にて

庭にくちぬるとはくち木の事也、其を花の散て積たるに

取成はへる也、雪もしはしの名残とは、散て雪のことく

に見えしも、やかて朽ぬれば、しはしの名残とにや

二七 門ふりはつるよもきふのおく

二八 しはしこそ人もかけせし花散て

蓬生のおくも花の比はしはし人のとふ事也、それも花ち

れは又門もふりはつる事也

二九 吹すさむ後はしつけき松の風

三〇 花はこゝろとちるかこそ見る

松風の静なる時分に散花は、心とやちるらんと恨たる様

也、吹すさむとは吹やみたる事也

三二 はかなきことをおもふもそうき

三三 いかにかにせは散しとはなにあくかれて

これも前に有し兵部卿の宮、母の形見の花に几丁なとを

木こめぐりに立て、散らさしとし給し事也

三四 うちたのみつる身こそあたなれ

三五 ちらぬ間に又もとくれは花もなし

散ぬ間に又みんとて来たれば、はや散はてたる花の事に

や、又見むと打頼つる身をはかなしとかへり見たる心也

三五 行かへりいやはかななる夢もうし

三六 あくかるゝまも花やありけむ

花にあくかれて行つかへりつみる内に、やかて散たるにや、あくかるゝ間もなかりしと也、花や有けんとは、花やありけんとなり

三七 おもひなるれば松風もなし

三八 花そうきいつかはちらぬ春もみむ

松風の吹ぬ時も花はかならずちる物なれば、花そうきといへり、松風のとかにてはなきと也

三九 身をなくさむもこゝろ成けり

四〇 よしやすめ花なき里はちるも見し

花なき里はちる事は見しと也、ちる別にあはぬはかりをなくさめに住んと也

四一 よ所にほとへてたれもかへるさ

四二 古郷は花やのこりてうらみまし

ふるさとの花をはきてよ所の花をみる人の事也、古郷に残りたる花はかやうの人をうらみんとにや

四三 さひしき夕たつねんもいさ

四四 音するも花散はてつ誰ならむ

花散はてゝさひしき夕に音する人は誰ならんと、不審したる事也

四五 何か思ひと成てかなしき

四六 花にたにあらしは聞し都人

都の人は花にも嵐をは聞し、されは何事を思ひとはすると也、都には嵐の吹ぬと読ならはせり

四七 見すてし夢のあとのほかなさ

四八 面影は青葉のはなのみやこ人

見捨し夢とは花の事也、都人の見捨しおもかけ、青葉迄残たる心也

四九 たれをあはれといふ人にせむ

五〇 こけふかきみ山かくれにさくら花

み山にさける花は、哀ともみる人あらしと也、もろ友にあはれと思へ山桜花より外にしる人もなし、この哥の面影なるへし

五一 のこれるは夢うつゝともわかぬ世に

五二 いらもみくらす雨風のはな

前句は人にくれたる人の難たる心也、それを花に取成たる也、いらもみつる雨風の後に残たる花は、夢うつゝともわかぬ様也

五三 うらみわひつゝ人そまたるゝ

五四 雨にしもあらし吹そふ花のもと

雨風を恨わひつゝ花のもとに人を待たる様也

五五 つらかりしをもさのみうらみし

二粟一もともあらしの残す花を見て

嵐の後、一もと残りたる花を見て、嵐や残しつらんと思

へは、さのみは恨ましきと也

二聖 柴の庵り花もうき世やいとふらん

二聖 風もさそへとさくらちるかけ

柴の戸の花の散るは、風もさそへとちるやうなれば、う

きよをいとふにやと思ふ心也

二聖 思ふあまりにかこちこそすれ

二聖 花そうきさそへ風とや咲ぬらん

花は風さそへとや咲ぬらんと、あまりの事にかこちたる

心にや

二五 やはおしからぬなこりなるへき

二五 思ひやれなれこし花に老の春

花の名残はいつくもおしかるへけれど、老の末迄なれこ

し名残は、猶もおしからんと思ひやれと也

二五 ころはうきによしやまかせん

二五 おしむこそちる花よりもはかなけれ

おしむ心はちる花よりもはかなければ、只時にまかせて

散してみんと也

二五 うらみしよさてこそあはれふかゝらぬ

二五 ちらすは何かはなのかなき

花は散事なくは曲有ましきと也、散によりてこそあはれ

もふかけれといへり

二五 かへるやとりもおちこちの山

二五 後にさく花をもしらす春くれて

のちにさくとは遅桜の事也、其時分鳥の帰るをいへり、

一句は春のくるゝをいへり

二五 うかるなころさくらもそちる

二六 春の野は小てふにもこそさそはれぬ

春の野はこてふにもさそはれぬへければ、うかるなとい

へり、心うかるなは、其まゝに桜のちらんとにや

二六 くる春のさかひもしらす返す田に

二六 一むら柳つはめとふ見ゆ

さかひに柳を付る事、常の事也、一村柳につはめとひか

ふ景氣かきりなし

二六 いくむら柳うちなひくかけ

二六 舟にけふ春の河つら過やらて

春の河つらの柳なひきあひたる景氣計にや

二六 軒はにすかるさゝかにのいと

二六 春雨の名残さひしき露見えて

すかるとは露のすかりたると付られ侍にや、春雨の名残

の露にや

二六 独只なかめてさひし春のくれ

二六 雨のとかなる軒のたま水

／＼つく／＼と春のなかめのさひしきはしのふにつたふ軒  
の玉水、此哥の心にや

二五九 しつけき宿に花おつるくれ

二六〇 ふる音もしのふの軒の春のあめ

しつけき宿と有に、ふる音も忍ふと待るにや、一句のし  
たてやさしき成へし

二六一 みなせのみやの春の夕暮

二六二 かすみにや栞のあはれものこるらん

春の夕の霞たるは、秋のあはれにもまさらんとなり、見

渡は山本霞水無瀬河夕は栞と何思ひけん、此哥の心也

二六三 ふもとのはしはきゝすなくなり

二六四 かり衣かすみも袖に夜をこめて

かり衣夜ふかく立出たる様也、雉子鳴といへるより、か  
りころもと付待るにや

二六五 花にいつれの嶺かこえけむ

二六六 あふ人に春のをちこちとはまほし

此あふ人はいつれの嶺の花をみて越つらん、とはまほし  
きにや

二六七 むかしの庭のさくらちるかけ

二六八 道しはにすみれつむ袖うちへて

昔の庭と有よりすみれは思ひよれり、昔みしいもかかき  
ねはあれにけりつはなましりの董のみして

二六九 手向るもさらにはかなき草のはら

二七〇 すみれつむ野、春のふるてら

董なとつみて、春のふる寺へ手向したる心也

二七一 かたみぬきいれつむすみれ草

二七二 何ならぬつはなましりの春の野に

かたみぬき入とは董つむかこの事也、ぬき入とは手にぬ  
ぎをして持たる事也、ぬき入と待るに、つはなを付待  
るにや

二七三 とはや人に松のした道

二七四 名もしらぬ春のむら草花さぎて

春のむら草の花は何の花そと人に問まほしき成へし

二七五 あれ田のはしのあはれなる色

二七六 それとなくしけき春草花さぎて

あれ田のはらは春草茂からんかし、あはれなる色とあれ  
は、春草の花と付にや

二七七 いもに恋わひ行やかへらむ

二七八 すみあらず垣ねは野への春の草

これも、昔みしいもかかきねは荒にけりと云る哥の心に  
や

や

二七九 野となるさとはすみれつむなり

二八〇 うつらなく栞よりさひし春のくれ

鶉鳴栞はさひしき物也、それよりも春の暮は猶さひしき

にや、野とならばうつらと成て鳴をらんかりにたにやは  
君かこざらん、此哥の心をとれり

二九一 さくらかうへの朝ことのくも

二九二 三面影はこれやむかしの春の夢

桜かうへの朝毎の雲は冥雲と見えたれば、是や昔の春の  
夢と付侍るにや、朝雲暮雨の古事成へし

二九三 衣手に花の雪ちるかけ分て

二九四 かつ野、みの、かすむ日くらし

、又やみんかたの、みの、桜かり花の雪散る春の曙、此  
哥の心也

二九五 夕の雨にかすむ柴の戸

二九六 あはれにも春の西日のさしすて、

春のにし日のさし捨たる柴の戸、何と哉らん物かなしき  
心にや、西日極楽などの事を心にうかへて云るにや

二九七 なみたの袖のひるときはいさ

二九八 春の日のひかりともなくふるさとに

春の日の光もしらぬ古郷は、涙の袖もほしやらぬ様也

二九九 花の山ちにあくかる、ころ

三〇〇 春もうきふるさと人や老ならむ

みな人は花みに野山へ行時分、老人はかり古郷の留する  
なとしたる様、あはれにや

三〇一 春行水にうかふうたかた

三〇二 雨さそふそのかはつの声たて、

うたかたとは水のあはの事也、それを哥に取なして、か  
はつは付侍るにや

三〇三 あけほのしるく山ののとけさ

三〇四 一こゑに春をふくめる鳥鳴て

明更に鳴たる鳥の一声に春の色ふくめる事を云り

三〇五 春のみならぬけふのわかれち

三〇六 夕くれのかすみに鳥も打なきて

暮春の時節、鳥も打鳴てかへるを、春のみならぬ別ちと  
いへるにや

三〇七 のこるを思ふ春のくれかた

三〇八 へりくひすの鳴音もあはれ老やうき

暮春の鶯は残鶯と云り、老の鶯とは声のふりたるを老と  
いへり

三〇九 松にや藤のさきのこるらん

三〇一〇 岸めくる春の住の江舟見えて

住の江に藤をおほくよめり、藤に興して舟もみゆるにや  
と云り

三〇一一 ほととぎすそれならぬかと鳴過て

三〇一二 木末の藤のたそかれのいろ

藤のたそかれの色はおほつかなき物也、その時分鳴たる  
時鳥はそれかあらぬかと也



三三 見よしのゝ吉野ゝおくの花に来て

三四 春をくらはせはきしの藤なみ

芳野に藤山ふきを讀り、春の限を吉野にてくらしたる心也

三五 いはぬ名残も文に見えけり

三六 山ふきを春もくれぬと折そへて

山吹にはぬと読るは、口なし色なれはいはぬ色と云り、歎冬を文に折そへてをこせたり、暮春をおしむ心やと推量したる心也

三七 なこりをはなにいふもはかなし

三八 ござせしと春をやおもふかきつはた

いふと云にかきと取寄り、かきつはたを垣と読る事多し

三九 いつくに行むみねは松風

三〇 かへる道春もまかへとちる花に

春のかへる道も此落花にはまよふへしと也、されはいづくに行かんと春に向て云る也

三一 散はてし花と思へは又落て

三二 山の水のはるのくれかた

又落てと有にみ山の水付侍る也、暮春の水に落花のなかれたるさま成るへし

三三 ほのかにかすむあかつきの月

三四 よしの山ふかき御たけの春くれて

吉野はみろくの出世を待所也、暁の月と有に三会の暁を思ひよせて吉野と付侍るにや、ほのかに霞は暮春の月成へし

三五 なみたやおとすうくひすの声

三六 二度と年にあひみぬ春くれて

二度とかへる事なき春なれば、涙おとして鶯(つば)の鳴らんといへり、声絶すなげや鶯一年に二たひとたに來へき春かは、此哥の心也

### 夏連歌

三七 なこりも思へなくほとゝぎす

三八 夏衣春をは誰かわするらむ

名残を思へと云を春のなこりの事に取なせり、夏来て郭公なと鳴を聞にも、花の春の名残わすれかたき事を、時鳥に對して云るにや

三九 いとくりたむる瀧のしら浪

三〇 すゝしくも誰をり出し夏衣

一句は衣のいかにも涼しけにうすくをれるを誰織出しと云り、付心は前句の瀧の糸を誰をり出と云り、清瀧のせゝのしらいとくりためて山分衣をりてきなまし

三一 衣手うすしあらし吹そら

三三三 けふも猶残る花ちり夏は来て

衣手うすしと云を夏のさ衣の事にして、あらし吹と云を  
余花の散るに取成たるはかり也

三三三 木ふかきおくに人かけそする

三三三 夏山のみとりに花やのこるらむ

夏山のみとりはいかにもふかゝらん、其おくに人影のす  
るはもし花やのこりつらんと也

三三五 山の木草は名をしるもなし

三三六 ひとりとや世をうの花の咲ぬらん

山の草木は何の木とも見えぬに、うの花はかりさきたる  
よし也、世の中をいとふ山への草木とやあなうの花の色  
に出にけん、此哥の心也

三三七 ふりても絶ぬ小車のみち

三三八 かさす日に神もいく代かあふひ草

小車の道といふをかもの祭に取なせり、かさす日に神も  
いく代あふらんとあふひを寄て云り

三三九 軒はの草の名のみなつかし

三四〇 いつかけしみすのあふひの残るらむ

前句の軒はの草とは忍ふ草の事なるをみすにかけしあふ  
ひに取なせり、めつらしくや、まつり過はてみすのあふ  
ひなとかれたる心也

三四一 卯の花やこの神かきは夕かつら

三四二 まつりのころを木末こふかき

是は脇也、うの花をゆふかつらにたとへたる哥おほし、  
祭の比とは四月の事也、其時分の木ふかくあらんかし

三四三 まちて幾夜と月もつたへよ

三四四 つれなきも誰にうらみん郭公

時鳥を待てつれなきも誰にうらみんと也、せめて月、郭  
公につたへよといへり、前句は恋也

三四五 あとよりふれる風のむら雨

三四六 郭公花も散あへすはや鳴て

跡よりふれるといふを、花散る跡よりと付る也、むら雨  
に時鳥必鳴は、花も散あへすはや鳴てとにや

三四七 あはれをよ所の事と思ふな

三四八 たかために空もくもらむ郭公

空もくもりたるをあはれといへり、是よ所の事と思ふな  
郭公鳴せんとて曇たれば鳴と也

三四九 夢ともさすかわかぬおも影

三五〇 郭公さたかならねと聞し夜に

時鳥一声鳴はさたかならねと、又夢とも思はぬよし也

三五一 かきくらしいつくもわかすふる雨に

三三三 行郭公みちまとへかし  
道まとへかしとは、こゝにしはしめてなけかしと思ふ  
に、何方へ哉らん鳴行は、恨て道まとへかしと云り

三五 おもひやいつる今の音信

三六 ほとゝきすをのかときはの山こえて

をのかときはの山とは、郭公の我か鳴へき時に思ひ出たるよし也、秀句成へし

三七 ことはりかほにうちかこつ暮

三八 時鳥忍ふの山にたへ侘て

忍ふの山といへは郭公も鳴ましきに、たへ侘て打鳴たるは、ことはりかほに聞え待るとにや

三九 夢となせとや音信もせぬ

四〇 それかとも又きかはこそ郭公

只一声なきて又もなかねは、此一声をも夢になせとてや、又も鳴かさらんと云り

四一 なにの身にてかかく忍ふらん

四二 おもふ事うちもなかなん郭公

時鳥は都などには稀也、されは何の身にて忍らん、思ふ事あらはいか程もなけとにや

四三 のとけき雨をひとり聞はや

四四 ほとゝきす思ふよひるの友もかな

雨なと長閑にふりたるに、郭公の鳴たるは、一入あはれふかし、是を同じ心に覚ん友もかなと也

四五 なくさめて程ふるのみは何ならず

四六 なかてや雨も山ほとゝきす

時鳥鳴ぬへきやうは、雨はふれとも鳴ぬ事也、雨はかり程ふるは曲もなきと也、なかくてや雨も山時鳥とは、雨もやまんと也

四五 うちまとろむもみしか夜の夢

四六 ほとゝきすおもひ絶させ問もうし

郭公今や／＼と待更てすこしまとろむ枕に聞しにや、鳴ましきにやと思ひ絶させてとふはうきとにや

四七 みる人やたれ軒のたち花

四八 ほとゝきす待つる月を雲間にて

時鳥鳴たる月は雲間にて、軒の橋など見たる人は、定心有人にや

四九 又うき雲の雨なさそひそ

五〇 時鳥ねたる声する山さとに

ねたる声とは外へも行てこゝにやとしたる声也、又うき雲なとさそはゝ、いつくへか行んと、郭公を執心したるにや

五一 更るまでねぬ声聞も猶あやし

五二 いかかなる夜はそなくほとゝきす

前句は人のねぬ声なるを郭公に取なせり、今夜はいかなる夜なれはか様に鳴哉らんとあやしふ心也

五三 うきあつまちそ行そらもなき

五四 郭公老そのもりにきゝすてゝ

老その森に聞捨て行は、ゆく空も有ましきにや、東路の  
思ひ出にせん郭公老そのもりの夜のの一声、此心也、老  
その杜は近江也

三三五 夏の夜はたゞ時のまの程なれや

三三六 なけは雲ひく山郭公

夏の夜のみしかきを云る也、雲引とは明かたの横雲の事  
也、夏の夜はふすかとすれば郭公なく一声にあくるしの  
ゝめ

三三七 後も又つれなきこそは頼みなれ

三三八 月には有明の山ほとゝきす

つれなきを月になせり、時鳥の鳴つる月残たれば、又や  
なかと頼みたる心にな

三三九 雲は旅なる山路ともなし

三四〇 かへるにはしかしもいつこ郭公

雲は旅とも見えぬ山路に、時鳥をいつくへかへると也、  
不如帰となく故にいへるにな

三四一 さみたれくらす日こそなかけれ

三四二 つまことにねなからふけるあやめ草

日こそ永けれと云を、あやめの根の長になせり、つま毎  
にとは軒のつまことにと云心也

三四三 一夜のやとも名残こそあれ

三四四 かけた敷のたもにかほるあやめ草

あやめは一夜敷てぬる物也、名残こそあれはかほる物  
なれば、一夜敷たるたもにも匂ひのとゝまりたる事也

三四五 今朝はたか軒の橋匂ふらむ

三四六 ふきてあやめもわかぬ家

あやめもわかぬとは、物の分別なき事をあやめ草になせ  
り、あやめふきたる家、は、誰か軒はともわかぬ心に  
や

三四七 花たちはなに人やかへらむ

三四八 茂れ猶むかしをやとの忍ふ草

昔を忍ふ草いかにも茂れとにや、忍ふ草しけからは人も  
かへらんとにや

三四九 おもかけは昨日の花に郭公

三四〇 むかしおほゆる軒のたちはな

時鳥の鳴たち花は、昨日の春の花に覚えたとにや、一  
句の心は昔の事を橋に覚えたとにや

三四一 水ふかくなるやなからの橋柱

三四二 あしの末葉のさみたれの比

さみたれに水ふかくなれば、長きあしも末葉のさみたれ  
とつゝけ待る所、粉骨の事成るへし

三四三 よし野、宮はふりて久し

三四四 五月雨の滝津かはうちかきくらし

吉野、宮は丹後の国にも有、付心は大和の吉野に取なせ

り、ふりて久しもと云を五月雨によせていへり、滝津河  
内よし野にあり

三九五 かきたえつゝに侘やくらさむ

三九六 さみたれはいつくのつても程をへて

五月雨の時分はいつくのつてもあらしかし、玉鉾の道行  
人のことつても絶て程ふる五月雨のころ、此哥の心也

三九七 ひまもる露の壁はくちにき

三九八 玉すたれのきの忍ふのさみたれに

軒の忍ふの五月雨の比は、壁も朽つへき事にや、忍ふ草  
生る家は、五月雨ももるへきにや

三九九 いま一こゑをなけほとゝきす

四〇〇 けふをのみ雨も五月もかきりにて

五月晦日の事にや、雨も五月もけふはかりなれば今一声  
をなけとにや

四〇一 うへたる小田に雨を待そら

四〇二 雲まよひはれぬ五月も時過て

五月の内は五月雨くらしして、六月は事外てりまされば、  
さみたれの比植たる田に雨を待様也

四〇三 ひとつつゝならふ家ゐの数見えて

四〇四 ゆふかほなれりそのゝくれ竹

数見えてとあるを、夕かほのみのなりたる数に取なした  
る也、夕かほなれりとは万葉に読り

四〇五 あまたすむ牛に侘しき草の庵

四〇六 花はしろきもけふる夕かほ

夕かほは小家などに必かゝる花也、小家のけふるに花も  
ふすふるよし也

四〇七 更てこそ吹くる風もすゝしけれ

四〇八 月にのこれるよひのかやり火

かやり火の煙の夜更てしめりたる比は、風もすゝしきに  
や、よひの間はうるさかるへきにや

四〇九 立こそかへれ門のやすらひ

四一〇 蚊やり火のしめる程まつ夕すすみ

かやり火の煙うるさければ、門なとへ出てしめる程をま  
ちてかへり入たるさま也

四一一 うちはへて舟さすさほの見えかくれ

四一二 さはへに夏の野は茂りけり

舟行さはへに夏草たかくなれば、さほの見えかくれする  
様也

四一三 暮にけりたかへて門やたゝくらん

四一四 山水とをしくゐななくいは

くゐな山水にこそ鳴へきに、草庵の門のほとりになければ  
門たかへかと也、たゝくといふはなく事なり

四一五 くるゝと見ればあくるみしか夜

四一六 夏かりのあし火ほのかにもえ初て

夏かりのあし火ほのかにもえ初るとは、みればやかて明  
たる夜の事にや、みしか夜といへるに夏かりのあしをは  
思ひよれるにや

四七 夢とたにいひあへぬまの衣くくに

四八 夏のよはかり何かはかなき

これも夏のよのみしかき事はかり也、夏のよはかりとは  
夏の夜程はかなき物はなき也

四九 雲はみなへたてなくてや晴ぬらん

四〇 うすき衣のなつのよの月

雲を衣に付はへり、うすき雲の衣は、月にもへたてなく  
はれぬらんとにや

四一 はては袖から紅に成つへし

四二 あさ夕露をなてしこのかけ

前句は紅の涙の事なるを、撫子の露をなつる袖はから紅  
にやならんと也、なてしこといふあれはかく云り

四三 又むらさめの露のすゝしき

四四 ほのうすきせみのは山の夕日かけ

せみのは山の夕日影は村雨の名残成へし、涼しけに聞え  
侍り

四五 あつさにたへす夏の日くらし

四六 せみの声きけは身もこそくるしけれ

蝉のくるしけに鳴たるを聞は、身もくるしきとにや、極

暑の時分成へし

四七 雲にわかれて月のこるそら

四八 清見かた岩波しらむ夏のよに

きよみかたに横雲を誦ならはせり、是は短夜の事迄也

四九 とりあへぬまで明やうすき比

五〇 蛭とふ宿は中河又やねむ

彼中河のかたたかへの事成へし、蛭なと有由詞にも見え  
侍り、つれなきをうらみもはてぬしのゝめにとりあへぬ  
まておとるかすらん、此哥源氏君誦給しと也

五一 はなれ小嶋にあし火たくかけ

五二 とふほたる行かたもなくさ夜更て

はなれ小嶋の蛭は行かたもありかたくや、あし火を蛭に  
取なせり

五三 庭すさましく成やはてまし

五四 この比の夏をせきやる水すみて

夏をせきやる水涼しけにきこゆ、この水は渡はすさまし  
くやならんと也、すさましきとは寒き事也

五五 くるやこすやのくれ毎のそら

五六 山かけに爍をおほゆる水せきて

くるやこすやとは人の事なるを、爍の来る事に取なし侍  
り、山陰にせき入たる水は、爍のこづくに覺えたるにや

五七 琴のひゝきもさむき夕暮

四二 夏の日のかたふくなかれ岩こえて

岩こゆる夏のなかれは寒くもあらんかし、琴に流を付る事、高山流水とていつれも琴の曲なれば也

四三 むすこけふかし山の井のかけ

四四 すゝしきは桐の若葉の木の本に

桐は井のもとに植る木也、山の井に桐の若葉と付るにや

四一 山のかげ野は採風そふく

四二 日くらしにかけとめらるゝ夕すゝみ

日晩は夏未より坪かけて鳴虫也、山陰に多読り、かけとめらるゝとは日晩の鳴たる夕へ面白ければ行やらぬ様也

四三 竹は千尋に夏ふかきかけ

四四 よひ／＼のうたゝねすゝし窓のまへ

窓前の竹成へし、若竹のなひきたる窓の内うたゝね涼しくや侍らん

四五 ゆふたちならしよひのまの雨

四六 夏衣うすきうたゝねひやゝかに

夕立したるよひのうたゝねはひやゝかに有へし、一句のしたてえんにやさしく聞え侍り

四七 くるしげに鳴こそくらせ蟬の声

四八 けふはすゝしき木のもとまなし

けふは涼しき木の本もなしとは、いつくもあつき日の事也、あつきをくるしめる蟬の事成へし

四九 見そめつるほとは心のなをさりに

四〇 雲間はよひの月のすゝしき

よひの間は雲なとかゝりたる月の、更て涼しき心にや、見そめたるとは、よひにみし月より更て月は猶面白とにや

四一 水にめくれる池のすゝしき

四二 影にほふはすのうき葉の夜はの月

水にめくれる大事也、月はめくる物なれば取寄り、蓮の浮葉の露に匂ふ月影はいかはかり涼しからんと也

四三 てる日にも猶池のすゝしき

四四 はちす葉に露は玉こえ雨過て

すゝしかりつる雨は過て、蓮葉の露は玉のごとくに見えては、てりまさる日にも池はすゝしかるへし

四五 たちとまるへき風そすゝしき

四六 手にならず扇ににほふうす煙

扇に匂ひをとむる物也、立とまるへきとは焼物の煙成へし、手にならずとはてになるゝ事也

四七 きけはみやこそとをさかり行

四八 夕たちに猶なる神の音羽山

夕たちのなる神音羽山のかたへなり行は、都はとをく成るへし、前句は旅の句也

四九 なを天地をてらす日のかげ

四〇中／＼の夕立過てあつき野に  
夕立の後はおつき物なれば、中／＼夕立過てあつきといへり

四一 なかむれは水うみわたる舟の上

四二 夕たちならしけしき涼しき

四海の舟の夕立にあへる様にや、哥にも詠り

四三 おりはへ水にみそきするころ

四四 夏衣日もやうすく暮初て

夏の日の暮初て水におりはへ、御抜したる様成へし

四五 音も冱なる水のしら浪

四六 夏ころもほすともいつか河やしろ

河社といふ事、大方秘事と見えたり、かはやしろしのおりはへほす衣いかにほせはか七日ひさらん、このうた

のころにや、かはやしろとはいつかはくへきといふ秀句也

句也

四七 すゝしく落る石河の水

四八 御被せしあさせの声も更る夜に

石河はあさきもの也、瀬の声は浅所ならてはなき物也

四九 はやくもいまそ袖のすゝしさ

五〇 行水の岩きる瀬ゝに御抜して

はやくといふに岩きる水を付侍るにや、よしの河いわき

りとをし行水のはやくそ人をおもひそめてき